

## 遠い記憶と

### 悠久の平和(二)

香川県 井上 幸男

#### 明野飛行整備軍属の人達

私が演習に参加したのが、陸軍航空戦闘隊発祥の地、明野に初めて着任し、整備の技術の向上に努めた時である。

さすが陸軍航空隊のメッカだけあって、隼一式、二式戦座戦闘機、三式戦闘機、四式戦闘機の機種が多かった。支那(中国)大陸において活躍した九七戦と、毎日の操縦訓練。飛行に対する戦闘整備、清沢曹長の講義学科・実技と実践技術習得に努力したものである。ここには、近郷一帯より多くの軍属の方々が勤務していた。

それぞれの部署について技術の錬磨である。四式の整備から、一式戦、二式、三式、四式とあら

ゆる面に配置されていた。

機材庫には、部品係に女子もいる。当時は、兵隊より軍属さんが多いのかと思っていた程だった。

三カ月の間まず、四式戦を本格的に勉強したものだ。工員さんも我々より、整備の技術は上であったので、いろいろ教えてもらった。三人一組で、四式戦一機の受持ちとなる。試運転もできるようになり、離れてエンジン音を聞くとよく解る。打合せで、油圧、排気温等のチェック。無事終了すれば、ピストへ報告と順次の計画に移ったものだ。

飛行訓練、射撃訓練、格闘技と経過良好なれば一日が嬉しかった。やがて、三カ月の演習参加も終了して、お世話になった軍属、工員さん達に礼を言った。別れ際に「卒業したら、明野へ来いよ」と言うことであつた。

岐阜校全員、明野配属となつたわけだが、我々が先輩ということになつた。明野配属で着任する

と、まるで我が事のように喜んでくれた。この方々が、比島戦において数多く生きて帰らざる人となったのである。

軍属の人は兵隊よりも技術は良く、年配の方々……。本当の親父のような方も大勢参戦し、ネグロス山中の各戦闘において、設営隊として道なきジャングルに先行して物資輸送についてたのである。

兵と共に行動し、その陰に隠れた功績は、戦隊史に記されていないが、私は数々の想いがある。戦隊の地上勤務の功績は、この方々の上にある。身は比島の土になられても、御霊は日本のご家族の許で安らかにお眠り下さいと祈るのみである。

私には、今静かに目を閉じると、二〇〇戦隊として比島作戦（激戦の、昭和十九年三・四・五・六月）に参加し、ネグロス島で共に戦った同期の面影が……浮かぶ。

サラビア、タンザ、マナプラと各飛行場での愛機整備に苦闘奮戦。また、命令に依り、本部本隊より各任地へ向かった同期、二度と逢うことのできなかつた同期生。シライ海岸陣地（敵上陸地点の一つ）艦砲射撃により全滅。

山中の設営隊員、野戦病院、負傷者収容要員、戦闘要員と別行動。これらの消息は、現在でも不明である。

私は戦闘要員なれど数々の陣地で戦死した戦友の名前が十分に思い出せぬ。極限の記憶がはつきりするものと、思考できないものがある（激戦による放心状態）。マングガランの密林で病魔と飢えに倒れし戦友、同期生。戦闘要員として、切り込み隊、肉迫攻撃隊員として散った戦友たち。その一身を顧みず、ただひたすらに祖国の勝利を信じて散華した童顔が半世紀過ぎた今でも臉に浮かぶ。胸にせまるものがある。

ことに明野の忠魂塔の前にたたずむと、目頭が熱く潤む。私の人生が終えるまで脳裡から消える

ことはない。

昭和二十年六月七日、ルソン島戦死者、二十二  
人。

榊原大尉指揮下、アリタオ激戦、五人。

二〇〇戦隊、同期、七十一人、生存十二人。

ルソン島戦死、三十四人、帰還後病死、二人。

ネグロス島戦死、二十五人。

明野慰霊祭に参加して

平成九（一九九七）年十月二十四日

錦秋の好天に恵まれて元戦隊隊員遺族多数の参  
列の許に三八〇人有余。平成八年より多くおごそ  
かな式典となる。国家の為に尊い命を捧げた多く  
の御霊のご加護ありと思われる。

年を経る毎に参列者の数少なくなる中、二〇〇  
戦隊の遺族の方々が出席された事は、悦ばしい事  
なり。

ある遺族の方は、忠魂塔慰霊祭がある事さえ知

らず、只何年何月〇〇方面にて戦死と記した紙片  
一枚との事。今日参列したのは、どこでどのよう  
な状況の下、どのような戦死かそれが納得でき  
ず、五十数年間胸につかえていたと。もし、復員  
された隊員の方でどんな事でも手がかりを知らせ  
て下さいと、〇〇の消息をと……それは肉親の真  
実の願いかと思います。また、それが本当です  
……。

ふと……私は命ながらえて生きて帰った自分が  
ここへ来て良かったのか、同席して良いのだろうか  
かと思った。それは戦死した身内遺族の方々に申  
し訳ないと自責の念であったのか……でも生きて  
帰った自分は、当時の状況を知るかぎり詳しくお  
知らせする事も、ご家族のそうでしたか、そうで  
あったのか……と御理解と納得が得られるもの  
と、私の自己紹介の順番がくるまでに心に決した  
のであった。

順次自己紹介が進み自分の所にマイクが手渡さ  
れ、座ってより立ち上がり自己紹介とネグロス残

置隊の戦鬪の状況説明、行動を共にした戦友名と戦死状況は、私が最後まで看取り埋葬した事を後刻お話ししますと言う事で、次の方にマイクを渡す。

参加出席者の健勝の乾杯も終わり、会食が進む中、遺族の萩原久雄軍曹の妹夫婦が進みより「御苦労様でした」と言葉の終わらぬうちに、妹さん（兄妹）より兄の戦死の問いかけに、三月より各陣地作戦に苦楽を共にし、八月十日前後の状況を説明申し上げたのである。

死の前日、顔と身体を拭いてあげると「あー気持ちが良い、東はどっち」と言う問いに、あちらの方が日本だと指差すと、コクリと頭を下げた。もう横になると言う事で寝る。

マラリアと栄養失調で視力も衰えて、すべてが手渡しの状態になり、その夜二人並んで寝る。朝、目がさめて萩原伍長と呼べど返事なし。まだ眠っているのかと思いい身体を揺すると返事がなく、冷たくなっていたのであった。

三月より半年間、苦楽を共にした兄貴のような伍長がまたネグロス山中で露と消えたのである。悲しくて悲しくて男泣きしたものであった。辛い悲しい終戦五日前の出来事で、今でもはつきりと記憶に残っている戦場の出来事であります。

萩原妹夫婦と兄嫁も充分納得されて、何度も何度も礼を言ってくれて、胸につかえていた物が一つ軽くなったように私は思えたのである。

江口（同期）の兄も自己紹介と同時に涙声になり、弟の戦死状況を知りたいと訴えた。長野准尉も同席していたので長野さんに聞いて下さいと、兄も承知して説明を受けたようだったが、大隊本部へ切り込み隊報告だからそこで迫撃砲の攻撃を受けなくても数時間後には、敵前で散華するものと推察できます。

帰りに二人で京都―岡山までの車中で納得できるまで話し合ったのである。岡山駅で別れ際に丁寧にお礼を述べられた。本当に悲しい別れなり。

島根の影山（同期）の遺族も懇親会場で戦死の

状況を知りたいとの事で、当時の事を思い出し、影山が三月二十日頃の洋上よりの艦砲射撃で陣地が破壊され、六く七人の戦友と散華戦死した事をお話する。遺体の収容も尋ねられたが、徹底的な破壊攻撃で収容するも不可なる事であった事も話し、悲惨極まる戦場である事を理解して頂いたものと感じた。

同期の井上からシライ海岸陣地と戦死の状況も教えて頂いた。「良く戦った」とお墓に参り報告して下さいとお願ひ申し上げました。

本当に終戦後五十三年目で本年ほど、悲しいお知らせばかりの忠魂慰霊祭はありませんでした……。

まだまだ胸につかえるものがありますが、その一つは米軍に投降した時点まで身につけていた遺髪を焼却された事が一番残念で悔やまれます。

他の遺族の方と明野でお逢いすれば知る限りのことをお伝えし、健康に留意して毎年参加したいと思う次第であります。

また、同期の牧野君の姉とも十年ぶりでお逢いでき、来年も明野でお逢いしましょうと別れた。

#### 工藤中尉戦死調査について

十月二十二日夜、ご遺族の甥に当たる方（工藤和好氏）より、仲野さんから聞いた「井上さんにお尋ねせよ」と言う事で電話があり、二十三日に出発し、二十四日に明野で残置隊長の長沢中尉さんにお聞きしてお返事しますと申し上げましたが、長沢さんが参加されず他の方に聞いたのですが充分なるものが得られず、二十四日午後十時前に帰宅し、夜分遅い時間なれども少飛岐卓会の後藤君に「浜畑君に（ネグロス戦死工藤少尉の当番をしていたので、もし最後の状況を覚えているのであればと……）事情を話して宮城県のこれこれをと工藤和好氏に報告してくれ」と依頼する連絡が取れ、すぐ電話にて報告すると後藤君より電話あり了解。

工藤氏に電話すると、浜畑君より詳しくお聞き

したとのこと、同期の浜畑君は工藤中尉の最後を看取った本当に悲しい思いの体験者の一人である。

宇佐美重雄曹長のご遺族とお逢いして

サラビヤ飛行場の整備で苦楽を共にして四国という事で親近感があり、ご指導頂いた戦死した斎藤軍曹と仲が良かったと思う。四月・五月と山中の激戦でジャングルは焼原となる。

六月上旬、移動危険な谷間を上がり、中第一線・二線・三線と陣地作り配備につく。迫撃砲が第一線を飛び越えて二線・三線に落下炸裂して数多くの戦死者が出る。

その中に宇佐美曹長も含まれたものと思います。どこの陣地も悲しい思いばかりである。願わくは御霊安かれと祈るのみ。

御家族の方も納得されて来年も明野でお逢いしましょうと言う事でお別れをする。

同期森寿夫君のご遺族とお逢いして

森君とはサラビヤ飛行場で共に整備して苦楽を共にした仲なり。

二十年二月にシライに移動するも陣地構築、三月下旬に米軍の進行によりシライ東方の山中に移動、陣地構築。米軍の迫撃砲戦に共に必死になつて任務に励む。

四月に入るや迫撃砲の攻撃、海上から艦砲射撃、ナパム爆弾の攻撃と夜間は照明弾で真昼の如く間断なく攻撃を受ける。正に生き地獄の思いは今も忘れない。

そのような中、分隊は別だが元氣であつた。しかし食糧不足で誰もが眼光鋭く、頬は瘦けていた。来る日も来る日も（四月・五月）攻撃で山奥へ山奥への後退である。六月上旬にまた移動。敵機上空で、しかも低空ジャングルは焼野原の如く、動けば上空の敵機に発見されるようなり。その時点の迫撃砲の攻撃で戦死したと思われる。戦場の悲しい思いと同期森君の御霊安らかなれと祈

るのみである。六月上旬戦死。

一、志満つることなく 露と消え

明野にねむる 十五期の戦友

一、神ふるか仏なるや 不明ぬが

忠魂塔に 功おし閉ざして

一、身はネグロスの山中に 草むすも

御霊帰れよ 両親の許

一、終戦も間近なる 山中に

今はの際の 戦友看取る

一、悲しくて 夜半の陣地に只一人

男泣きした 月明かり

### 私の軍歴

昭和十八年十月一日

我が家を後に、大津陸軍少年飛行兵学校へ

入校

昭和十八年十月十一日

岐阜陸軍航空整備学校入校

昭和十九年四月一日 上等兵

昭和十九年六月 明野飛行学校へ訓練参加

昭和十九年九月末 岐阜陸軍航空整備学校卒

業

昭和十九年十月一日 兵長 明野飛行学校配

属

昭和十九年十月十二日

飛行第二〇〇戦闘隊編成 整備第一中隊付

昭和十九年十月二十三日

比島派遣となり明野離陸

昭和二十一年十二月十八日 復員 帰宅

三年二カ月有余

### 〔編注〕

井上幸男氏の手記は、第Ⅲ巻にも掲載されております。